

石工として多くの建築家と協働し自然石を用いた 日本ならではの力強い空間を実現した業績

和泉正敏 殿 [石のアトリエ主宰・(財)イサム・ノグチ日本財団理事長]

選定理由

1938年、古くからの石の町——香川牟礼に生を受けた和泉正敏氏は、多くの建築家と協働し、その自然石への深い慧眼と卓越した石組み・加工の技術によって、それぞれのプロジェクトにおいて際立って特徴のある力強い自然石のランドスケープを実現している。その石組みは伝統的な工法にのっとりながらもそれを超え、現代的な建築空間そのものを支え、空間に深みと力を与えており、“日本”ならではの自然を取り入れた豊かな空間づくりに大きな足跡を残した。

代々石加工に携わってきた「和泉屋」の三男であった同氏は、1964年25歳のとき、自ら「石のアトリエ」を開設。その後同年7月、金子香川県知事の紹介でイサム・ノグチに出会い、その制作を手伝うことになった。イサムは彼にとってまさに生涯の師であり、“黒い太陽”以来多くの彫刻とランドスケープの制作に参加するなかで、ルイス・カーン、丹下健三をはじめ多くの建築家や芸術家と出会い、多様な技術と広いまなざしを体得することとなった。同時にイサムの最大の理解者として、彼が1988年その人生を閉じるまで、日本での生活と活動を支えた。イサムの死後、イサムの作品の散逸を防ぎ、またイサムの心を若い人々に伝える目的でイサム・ノグチ庭園美術館開設に努力した。現在イサム・ノグチ日本財団理事長として、イサム・ノグチの作品と庭園の保存・環境整備に努めている。

その一方、引き続き日本の多くの建築家、ランドスケープアーキテクトと協働し、スライスされた薄板の石の使用が一般となっている現代建築において、加工を抑え石そのものの肌合いを生かした無垢の自然石の使用を展開、独自の空間の実現を支えた。山本忠司によるイズミ家(1972)はそのなかでも石の表情の多様さを見ごとの見せる初期の代表作であり、石の緊張感と暖かい抱擁感の両極端を感じることでできる傑作である。その後も丹下健三、イサム・ノグチと草月会館プラザ(1978)、石井修と目神山の一連の住宅(1976~92)・シャルレ本社ビル(1983)、谷口吉生、イサム・ノグチと土門拳記念館(1983)・丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(1991)ほか、レイモンド・モリヤマとカナダ大使館(1991)、柳澤孝彦と郡山市立美術館(1992)・東京都現代美術館(1994)・新国立劇場(1997)、磯崎新と播磨科学公園都市(1993)・京都コンサートホール(1995)、アーキテクトファイブとモエレ沼公園(2005)等、杉本貴志とグランドハイアット東京石庭(2003)等、内藤廣とパークマンション千鳥ヶ淵(2004)・二期倶楽部七石舞台(2007)、中村光男(日建設計)と京都迎賓館(2005)と数多くのプロジェクトにかかわり、日本の現代建築に大きな足跡を残している。

日本の伝統的な作庭手法とは一線を画し、しかし石の本来の力を信じ引き出そうとする態度はまさに“石のことは石に聴け”と主張した作庭の祖、夢想国師の精神そのものであり、モダンでありながら永遠である。その業績はほかに比べられるものがなく、多くの建

築家に無垢石の魅力を伝え続け、あるいは硬く冷たく、柔らかく暖かい石の多様さを表現し、自然の力を感じさせる日本ならではの空間創造の実現に大きな力となった。これらの功績はまさしく日本建築学会文化賞にふさわしいものである。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。

受賞所感

日本建築学会文化賞をいただき、真に有難うございます。

建築と石との関係は深く、世界の文化遺産として、また日本の木造建築においても石は重要な役目を果たしています。家を建てるにあたり、神聖な場として清められた地に、建築の要となる基礎石が据えられ、柱が立ち、竹と土によって構成されていく。

幼少のころ、私は石のなかで遊び、周りの職人さんにかわいがられ、学校より面白いときもありました。家の表の空間で、冬の寒い日、年末に牛車で運んできた石を玄能で割り始めたり、うわぐに使う松の木を、山で切り倒し持ち帰った原木に、手斧削りが行われた。私が難しい墨打ちを見たのは大工さんの仕事で、長い曲がった木、細やかな造作の墨付け、墨指して書く字も木に合っていた。左官さんの土練りは、裸足で柔らかくなるまで踏んで楽しかった。

石の仕事場では、早朝から鞆を吹いて鑿を焼き、歯を食いしばって、荒石に一日中鑿を打ち続けると、縦のものを横にもしないというほど体がかたくなに動かなく、無口で朴訥な人もいたのですが、純粹でした。山の丁場も重労働で危険と隣り合わせ、気性も荒い人がいて、いつも石に立ち向かい、生真面目で、さっぱりしていた。文字彫りさんは毎日、下にうつむいて、石とノミの先だけを見つめていたが、晩年まで生きていく話をしてくれた。石を磨く女の人の声はいつも弾んでいたが、長時間の後、美しいつやが光っていた。

石の特徴を生かし、築城の石垣、禅の庭などで、空間、精神性等においても、あるとき、究極に到達した感がありましたが、機械の進歩とともに近代建築、庭園等にも石は対応することが可能となり、建築家、彫刻家をはじめ多くの方々から貴重な教えをいただき、新たな可能性を求めて進んできました。これからも私達は、伝統と技術を大切にしながら、明日に向かって、生物の根源である石に新しい息吹を与えていきたいと思えます。

いずみ・まさとし

1938年生まれ/1953年石の仕事を始め、1964年「石のアトリエ」を設立。同年、彫刻家イサム・ノグチと出会い、以後25年間、石彫制作に協力/1994年SDA特別賞、1995年日本現代芸術振興賞、2002年よんでん芸術文化功労賞、2006年国立故宮博物院正館二階バルコニー屋外彫刻コンペ最優秀賞、2007年山陽新聞文化功労賞受賞

